

本論文は、明治前期の言論界において福沢諭吉と並び称された福地源一郎の新聞記者としての活動を追い、その思想に迫っていくものである。具体的には、福地が『東京日日新聞』の主筆となった1874（明治7）年からおよそ10年間の同紙の論説記事を中心に検討し、「公論」と「国民」をめぐる福地の言説を辿り分析することで、その歴史的・思想的意義を明らかにするものである。本論文が「公論」や「国民」の問題を切り口に福地の思想を明らかにしようとする理由は、この問題が彼の言論活動の中で大きな比重を占めるものであり、さらに近代新聞が追求した大きな課題でもあるからである。すなわち、新聞という「公論」を形成する政治文化を定着させ、その中で日本という「国家」の独立を支えるために必要な自覚的な政治的主体、つまり日本の「国民」であることを自ら意識する「国民」を創出することが、福地にとって極めて重要な課題であった。以上のことを念頭に考察を進めていくが、言論人としての福地の思想的研究は、これまでほぼ停滞した状況にあったと言ってよい。では、なぜそのような状況が長く続いているのか。その理由は大きく二つある。

まず一つの理由は、戦後歴史学の花形であり、1950年代及び80年代に盛んに行われた自由民権運動に関する研究が、反政府（反権力）の態度を基調とする民権家の掘り起こしや顕彰に力をそそぎ、その結果、福地の如き「御用記者」は、その思想に立ち入って検討することのない状況が続いてきたこと。そして、もう一つの理由は、戦後民主主義の風潮の下で、市民的自由主義者としての福沢諭吉の研究が盛んに行われてきたことである。福沢研究の中での福地の位置付けは、詳細な検討もなく、政府の代弁者とされることが多く、反民権、反福沢とされ、研究の対象とはなりにくかったのである。

このように福地を無視してきた先行研究は、彼を「御用記者」、「官権派」、「漸進主義者」などと位置付けてきた。本論文では、福地をこのような一つの枠組みで捉えることはしない。これまで光りを浴びることの少なかった福地の新聞論説を検討することで、むしろ、そういった平板な枠組みを解体していくことを目的としている。そこで、本論文では、以上のような分析を通して、新聞記者福地源一郎の隠された思想を浮き彫りにすることで、「双福」の時代を描く端緒となる作業が行われる。

第1章「新聞記者」の誕生」では、「新聞記者」としてのパイオニア的役割を果たした福地源一郎の自己認識に迫る。明六社に代表されるような当時の啓蒙的知識人との違いを意識し、「新聞記者」の社会的責務をどのように捉え、言論を通じたコミュニケーションのあり方を考えていたのかを検討する。

第2章「政論新聞化と福地源一郎」では、新聞が自覚的な「国民」の形成を課題とするようになった政論新聞化の過程を、福地に注目して分析を行う。具体的には、「論説」の抬頭に焦点を当て、『日新真事誌』や『郵便報知新聞』との比較を行い、文体をめぐる議論にも触れながら、福地の新聞観とその影響について論じる。

第3章「福地源一郎の「国民」形成論」では、まず福地と彼が政治的方向性において共感していた木戸孝允を、次に彼とその論争相手である『郵便報知新聞』とを、民権の主体となる「国民」像を中心に比較する。そして、福地を「民権派」に対する「官権派」、「急進派」に対する「漸進派」と位置付けてきた明治前期思想研究の二項対立的分類に見直しを迫る。

第4章「福地源一郎における「輿論」と「国民」」では、前章で取り上げた士族平民民権論争の延長戦とも言える、『東京日日新聞』投書欄で行われた「華士族」をめぐる論争を取り上げる。このような報道を積極的に行った福地が、新聞を通して、どのような議論（論争）の形態を作り上げ、「輿論」を形成しようとしたのか。そして、その議論の中で、如何なる「国民」を創出しようとしたのか。この二つの問題を明らかにする。

第4章「双福」と「自治」では、福地と福沢の「自治」をめぐる認識を、議会構想に焦点を当て明らかにする。両者は、三新法の制定後、「公選」制によってはじめて開かれた1879（明治12）年1月の東京臨時府会の場で、初代議長・副議長にそれぞれ選出されており、当時の地方自治を牽引する存在であった。「封建」から「郡県」へと急速な中央集権化が図られる中で、両者が「自治」をどのように捉えていたのかを踏まえ、明治前期の「国民」像をめぐる問題を整理する。

そして最後に、本論文の成果と残された課題を結論として提示したい。

提出者	岡安 儀之
論文審査担当者	(主査) 教授 佐藤弘夫 教授 安達宏昭 准教授 片岡龍
論文名	福地源一郎研究序説——明治前期における「公論」と「国民」の形成

本論文は、明治前期において福沢諭吉と並び称せられた福地源一郎の言論活動を、「公論」と「国民」の形成という角度から照射することで、明六社や自由民権運動を中心に構築されてきた従来の明治前期思想研究の枠組みに、新たな展望を切り開くものである。

序論「福地源一郎研究の視角」では、本論文の課題と意義が言明され、それをもとに先行研究の成果と問題点とが指摘される。ついで、各章における課題が概観される。

第一章「「新聞記者」の誕生—福地源一郎の自己認識を中心に」では、福地が「新聞記者」の社会的責務を、言論の力で、「人心」や「輿論」を牽引し、社会を発展させる点にあると自己認識していたことが論じられる。またそれは、社会的対話を喚起し、「大衆」を「変革」させるとする点で、明六社などの貴族主義的な啓蒙のあり方とは、一線を画するものであったと指摘される。第二章「政論新聞化と福地源一郎—『東京日日新聞』の変容とその影響」では、自覚的な国民の形成という課題を日本の新聞が追求するようになった「民撰議院論争」における各新聞の言論活動の実態を精査することにより、新聞「論壇」化に果たした福地の決定的役割の意義が論じられる。第三章「福地源一郎の「国民」形成論—士族平民民権論争を中心に」では、民権の主体をめぐる論争の内容を再照射することで、従来の「民権派／官権派」「急進派／漸進派」という明治前期思想研究の二項対立的な視角では捉えきれない、福地の「国民」形成論の独自性を浮かび上がらせている。第四章「福地源一郎における「輿論」と「国民」—「華士族」をめぐる論争を題材に」では、福地の「国民」形成論の独自性が、社会に根強く残る階層意識を言論の力で刷新し、だれもが議論に能動的に参加できる民主的「国民」の連帯の創出にあったことが論じられる。第五章「「双福」と「自治」—明治前期における二つの「国民」像」では、「自治」をめぐる福地と福沢諭吉の認識を比較することで、福地の「自治」論には、暴力性や欺瞞性をも内包する「文明」論的思惟を相対化し、旧慣の中で培われた「平民」の生活体験に「自治」の伝統を見出すという特徴をもつことが論じられる。

結論では、各章の内容がていねいに総括され、残された課題と展望が的確に指摘されている。

本論文は、粘り強い史料調査、明確な論点の提出、叙述の堅実さ、全体の有機的な構成等の点で、きわめて高い成果を収めている。論証の徹底性、問題提起力の大きさ、新たな視座の提示、政治史との連関等の点で、今後の研鑽の余地を残しているが、本研究を始点として、今後の明治前期思想研究が確実に進展していくことが期待される。本論文の成果が、斯学の発展に寄与するところ大なるものであることは疑問の余地がない。よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。